

1) 著作権保護のための表示

-----

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

-----

2) 研究会基本情報

-----

タイトル：「接続する海としての地中海」（令和5年度第3回研究会）

日時：令和6年3月16日（土曜日）午後1時～5時

場所：AA研302小会議室/Zoomによるオンラインのハイブリッド

報告者名（所属）：

Felix Arnold（AA研共同研究員、German Archeological Institute Madrid）

押尾高志（AA研共同研究員、西南学院大学）

深見奈緒子（AA研共同研究員、日本学術振興会カイロ研究連絡センター）

相磯尚子（ゲストスピーカー、慶應義塾大学）

Peter Kitlas（ゲストスピーカー、American University of Beirut）

このほか、Georg Christ（University of Manchester）、熊倉和歌子（慶應義塾大学）、黒木英充（東京外国語大学）、篠田知暁（東京外国語大学）が参加したほか、3名の外部参加者があった。なお、Christと熊倉はオンラインでの参加となった。

報告タイトルは以下の通り。

Felix ARNOLD, “Garden architecture across the Mediterranean from the 10th-15th century”

Naoko FUKAMI “The Mediterranean Sea from the viewpoint of the Islamic Architectural History; Focusing on Techniques”

Takashi OSHIO “Muslim Pilgrimages from 15th Century Iberia to Mecca: A Journey from Avila (1491-1495)”

Peter KITLAS “Scribal Spaces and Diplomatic Knowledge Production in the Eighteenth-Century Muslim Mediterranean”

Naoko AIISO “Navigating a Connected Sea: Ottoman Captains and their Promotions in the 16th Century Ottoman Empire”

Arnold 報告は、庭園が王権の秩序を表象するという古代メソポタミアに端を発する観念を紹介した。この観念に基づいて作られた庭園は、イラクのバグダード、サーマッラーからイベリア半島のコルドバ、ムルシア、グラナダへとその地理的条件に適合しながら伝播し、さらにルネッサンス期イタリアのフィレンツェにまで伝わった。

Fukami 報告は、イスラーム建築のドームに用いられる様々な技術の分布について、前イ

スラーム期から 18 世紀に亘って論じた。ドーム建築の技術という観点からは、前イスラーム期の地中海世界は統一性を持っていたが、イスラーム時代になると東方起源の技術の導入によって、オスマン朝期までこの統一性は減少したとされる。

Oshio 報告は、15 世紀末キリスト教国カスティーリャのアビラからメッカ巡礼を行ったムスリムによる、アルハミーア (アラビア文字で書かれたスペイン語) の巡礼記を紹介した。その旅程の分析に加えて、テキストから現れるマーリク派ムスリムとしてのアイデンティティについて論じた。

Kitlas 報告は、18 世紀地中海地域における書記術のリバイバルについて論じた。特にモロッコでは書記の知識生産と外交官としての活動の交差がみられた。その理解には、ヨーロッパやオスマン朝の人々も含めた地中海の知的・文化的環境とともに、モロッコローカルな文脈も考慮に入れる必要がある。

最後の Aiso 報告は、オスマン帝国海軍の船長たちのキャリアを分析する。従来の研究ではレヴェンドと呼ばれる非正規の海軍力の重要性が強調されてきたが、船長たちの多くは正規の海軍士官であり、さらに島嶼部や地中海沿岸各地の地方行政官でもあった。また、彼らが任命される行政官のポストには序列があった可能性が指摘された。

以上の研究から、中世から近世にかけての地中海における、観念や技術の統一性と多様性が建築や書記術を題材に示されたほか、巡礼や軍人のキャリアの変化による人の移動の実態について分析がなされた。

最後に、次回ワークショップの時期を 2024 年 9 月頃とし、場所はエジプトやスペインで検討することで合意し、解散した。